

書評

ブリジット・ジョーダン著『助産の文化人類学』宮崎清孝・滝沢美津子 訳

東京、日本看護協会出版会、2001年、293頁、2500円



嶋澤恭子

滋賀県立大学人間看護学部

本書は、Brigitte Jordanの「Birth in Four Cultures: A Cross cultural Investigation of Childbirth on Yucatan, Holland, Sweden, and the United States」の翻訳であるが、R. D.Floydにより改定されたものである。¹⁾フロイドによる改定の意図は、当時のアメリカ流の出産方法を再考しようという動きや、出産研究を人類学的探求の正当な一分野として位置づけようとする中で一定のインパクトを持つ内容であったためである。フロイドはもともとの前半部と、新しく更新された情報を明示された形で挿入することで、実践的にも理論的にも現代においてより役立つものにしたと考えた。

内容は2部構成になっており、前半はメキシコのユカタンをはじめとしてアメリカ、スウェーデン、オランダの助産実践で行った参加観察を主とする記録、「助産の文化人類学」という民族誌である。初版は1978年に出版されたが、それは本書の前半部に限られており、その内容はジョーダンがカルフォルニア大学に提出した博士論文を骨子としている。後半部は1993年に追加、出版され、そこでは前半部の問題をさらに展開させている。主な内容は、助産婦¹⁾の養成、修業の過程と、助産にかかわる知識が如何に社会と関わるかの分析である。

この本の初版が出された時代背景は、1960 - 70年代のアメリカなど先進国における出産の医療化が進み、女性開放運動とともに自然出産運動の波が高まっていた時代である。さらに発展途上国では医療開発、WHOアルマアタ宣言によるプライマリーヘルスケアへの関心が深まり、コミュニティへの医療開発の関与も高まっていた。

それまでの出産の人類学に関する体系的な書は、ミードとニュートンの「周産期行動の文化的パターン形成」(Mead & Newton, 1967)²⁾ 以外になく、あったとして

も現地の実践者と儀礼に集中していた。その理由は出産という特殊な出来事への部外者の参与が難しいこともあるが、当時の人類学者のほとんどが男性であり、彼らが出産に近寄ることが困難という事情もあった。また、それと同時に出産研究は女の仕事であり、男性人類学者たちにはそれほど重要な研究対象ではなかった。

上のような状況下で、女性研究者のジョーダンは出産システムについてアメリカ・オランダ・スウェーデン・ユカタンの4つの異なる文化間の比較を行ったのである。その成果は1980年のマーガレット・ミード賞の受賞となり、現在においては出産研究の古典となっている。

前半部の特徴をみると、出産システムの文化間比較を行うにあたり、「生物・社会的枠組み (biosocial framework)」を用いた点を挙げられる。この枠組みとは、これまでの出産研究のように医学・生物学分野と社会学分野の二つの視点に分けるのではなく、2つの視点を合わせたことである。マヤの伝統的助産システムを分析し、それをアメリカ・オランダ・スウェーデンでのフィールドワークの結果との比較を試みている。それは出産をめぐるシステム独特の研究方法として、分娩準備の方法、立会人と出産支援、出産の専門家、参加者間の権限の分担と縄張り、医薬の使用、出産にかかわる技術等の分析をあげている。

この中で評者の興味を引いたのは誰が出産をコントロールしているのかという視点であり、出産システムの特徴が、意思決定の所在に大きな影響を与えるという点である。言い換えれば、システムが誰の立会いを許すかということ、それが出産過程の経験のみならず、その結果にも大きな影響をもたらす、「日常的な生活領域と特別な目的を持った施設の違い」によって誰が出産を「所有」しているのかが明らかとなる。

産科技術に関しても、出産時に使われる人工物、つまりその土地での正常な出産をするために使われるものや装置は、可視化された実際的な制約として出産システムに影響を与えるという点である。

2005年1月6日受理

連絡先: 嶋澤 恭子

滋賀県立大学人間看護学部

住 所: 彦根市八坂町2500

E-mail: shimazawa@nurse.usp.ac.jp

後半部の特徴は、研究の過程で抽出した「権威的知識 (authoritative knowledge)」を論じている。ジョーダンの言う権威的知識とは「共同体の成員によって正統的な意思決定のための基盤として示され、構築される知識」で、言いかえれば、それが自然で理にかなない、人々の合意を得て構築されたように思われる知識である。それはまた積極的に、また無自覚にその日々の生産、再生産に関与する。そして、権威的知識の力は「それが正しいことにあるのではなく、それが重要視されるところから来る」といった性質をもっていることである。この知識の形成に関わった歴史的な例として、ジョーダンはFlexner Report(1910)をあげている。それは当時の職業医療の動向をカーネギー財団の支援で分析した報告書である。これが権威的知識の確立をもたらしたとして「正規の専門的知識が主要な知識形態として確立し、ほかのすべての知識を非正統化し、新しく規定された専門医学に文化的権威、経済的権力、政治的影響力を与えた (p.185)」とジョーダンが記している。その理由は権威的知識が説得的であり、力をもつからである。権威的知識の例としてアメリカの分娩室をみると、そこで力をもつのは医師によってもたらされる知識のみであり、女性の個人的かつ、身体的な出産経験など問題外とされる。産婦は患者であり、物象化されている。

後半部の特徴をもう一つ上げるとすれば、J.レイヴとE.ウェンガー³⁾の“正統的周辺参加”論を取り上げ、人間の“学び方”、“社会の中での成長の仕方”についての実証的基盤を与えた点である。これは訳者の一人である宮崎も指摘している。

ジョーダンは知識転移の「形式的で講義調の教授モード」と「徒弟制の学習モード」の検討として、ユカタン半島における土着助産婦へのTBA (Traditional Birth Attendant) 訓練コースを取り上げた。

TBA訓練コースでは、受講者の行動の変容は最小限に留まるが、助産婦自身の仕事について語るための新しい知識を習得した。例えば、監督に来る医療行政スタッフと適切に話し、模範的解答ができるようになったことである。このように「形式的で講義調の教授モード」のコースでは、伝統的助産婦が「生物医学の言葉で語るという新しい能力」を身につけるという効果を生んだ。上の結果をユカタンの伝統的な助産婦の徒弟制と比較すると大変興味深い。ジョーダンは徒弟制の学習を「技能を修得することとは、熟練した身体的行動を獲得すること」と捉えている。徒弟制 (apprenticeship) とは、弟子が師匠の元に弟子入りし、仕事をしながら学んでいくシステムである。ジョーダンは、ユカタンの伝統的助産婦の研究において、徒弟制での学習の主な特徴として、知識獲得が師匠の積極的な介入なしに起こり、また意識的に学ぶということもなかったという。知識についての意識

的な教えや学びが存在していない「学び」である。まず、周辺の仕事をすることで参加し始め、徐々に重要な仕事へと参加を大きなものにしていき、やがて一人前の助産婦になる。この活動が学び(学習)とされ、レイヴとウェンガーの正統的周辺参加論での学び方にジョーダンのこの研究が大きく貢献した。学びについてのこの新しい考え方は、広くは状況的学習 (situated learning) 論と呼ばれる。人が知識と関わる場面に応じて知識の意味が変わってくることを、知識が状況付けられる (situated) という。

社会的実践の共同体の中で、彼(彼女)を取り巻く波紋のように熟練の諸レベルの階層的、同心円的な構造が存在する。熟練化の段階は、ここでは実践の共同体内への参加の程度によって緩やかな向心的運動として描くことが出来る。そして参加の程度による熟練の習得の差は、まさにその共同体内での、物理的、社会的位置づけの差としてこれを指定することができるだろうという結論を出している。

本書は、わが国の助産の現場に対して多くの示唆を与えている。中でも後半部は助産教育に関わることとなった評者自身にとって意義は大きく、以下の2点を記してこの書評を締めくくりたい。

第1は、教授モードでの学習は基本的に言語による知識の学習であるため、筆記試験ではよい解答は得られるが、実際の行動には結びつかない。しかし、それに代り権威的知識を吸収した結果、誰が言うことが「良い」とされているのかを見分けることや、語る能力が得られるという点は、教える側と教えられる側の在り方についての再認識を迫っている。

第2は学習の捉え方について新しい視点が得られたことである。学習とは社会的実践の一部であり、個人の頭の中だけの作業ではないという点である。人々と共同して社会でコトをはじめ、何かを作り出すという実践の中に学習を位置付けたい。学習だけを社会的実践の文脈から切り離して、独自の目標とすべき対象活動ではないと再認識した。教師が学生にとって学びの「師」(親方、熟練者)となるのか、それとも知的探求の「先輩」(古参者)となるのか、あるいは実践を「ともにする同輩 (near-peers)」となるかは、学生自身がどのような社会的関係作りの実践に関与して生きているかに依存するという視座は大変興味深く、また教師が学生と共に考えなければならぬ重要な点であろう。

言語化された科学的知識を伝達する場として助産教育が重要視されてきたことは、臨床現場では実践能力のない助産婦が存在するという問題を生んでいる。その中で、さらに高等教育化が進もうとしている。この時期に助産教育における学校教育を相対化し、その意義と可能性を再考することの必要性を改めて認識させられる一冊であった。

最後にもう一点を付け加えたい。本書のタイトルについてである。『助産の文化人類学』となっているため読み手を選ぶ感がある。しかし、訳者が教育学者や認知科学者であることから分かるように、新しい学習理論の一つとしても優れた著書である。

(注)

(1) 2002年の保健師助産師看護師法の一部改正以降「助産婦」の名称は「助産師」に変更されたが、本書の翻訳年が2001年で「助産婦」となっており、本文においてもそのまま「助産婦」を使用した。

参考文献

- 1) Brigitte Jordan, 1993, Birth in Four Cultures : A Cross cultural Investigation of Childbirth on Yucatan, Holland, Sweden, and the United States. 4th Edition. Revised and expanded by Robbie Davis Floyd Illinois: Waveland Press.
- 2) Mead, Margaret and Niles Newton, 1967, Cultural Patterning of Prenatal Behavior. In Childbearing: Its Social and Psychological Aspects. Stephen A. Richardson & Alan F. Guttmacher (eds.), pp.142-244. Williams and Wilkins.
- 3) ジーン・レイヴ, エティエンヌ・ウェンガー : (原著出版年 : 1991) 『状況に埋め込まれた学習 : 正統的周辺参加』佐伯胖訳 福島真人解説 産業図書, 1993.